

次の文章を読んで日本語と中国語の授受表現について、キーワードを使い日本語1,000字程度で論述しなさい。

キーワード：話し手 与え手 受け手 一人称 二人称 三人称 ウチ ソト

英語や中国語の表現に比べて日本語の表現は対象依存性が強く、相手が誰であるかによって言葉遣いに気を配るのである。例えば、英語なら **give**、中国語なら“給”ですむところを日本語では自分たちが属する集団(ウチ)とそれ以外の外部の集団(ソト)を区別して、人間関係に応じて「やる」「あげる」「さしあげる」「くれる」「くださる」「もらう」「いただく」を使うのである。言語表現で対象依存性が強いということは、文環境(context)依存性が高いこととつながる。その結果、概念体系の違いが思考様式や表現様式にも影響を与えることがある。概念の形成には人間が本来持っている概念化能力(**conceptualizing capacity**)と実際に習得する概念体系(**conceptual system**)が関与している。しかし、すべての概念が同じプロセスで言語化されるわけではない。

日本語の授受表現は述部の性格の違いによって二つのグループに分けられている。一つは「やる」「あげる」「さしあげる」「くれる」「くださる」「もらう」「いただく」のような動詞のグループであり、もう一つは「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」「～てくれる」「～てくださる」「～てもらう」「～ていただく」のような補助動詞のグループである。一方、中国語の授受表現についても二つのグループに分けることが可能である。“給”“为”“替”“帮”の後にさらに動詞が現れるか否かによって、“NP1+VP(給、替、帮)+NP2”のような動詞フレーズのグループと“NP1+prep(給、为、替、帮)+NP2+VP+NP3”のような介詞フレーズ(介詞短语)のグループに分けて考えることが可能である。

辞書的意味、教科書的意味について言うかぎり、中国語の“NP1+VP(給、替、帮)+NP2”、または“NP1+prep(給、为、替、帮)+NP2+VP+NP3”は日本語の「やる」「あげる」「さしあげる」「くれる」「くださる」「もらう」「いただく」に訳すことが可能である。しかし、「やる」「あげる」「くれる」「もらう」をどんな場合に「さしあげる」「くださる」「いただく」で訳すべきかについては、人称代名詞の意味・機能や帰属意識におけるウチとソトの人間関係と結び付けて考えなければならない。